

令和6年度第1回岐阜県総合教育会議 議事録

1 開催日時及び場所

令和7年1月10日（金） 10時30分 ～ 11時45分

岐阜県庁舎 6階 特別会議室

2 出席者

知事 古田 肇

教育長 堀 貴雄

委員 竹中 裕紀（オンライン出席）

委員 村上 啓雄

委員 市川 祥子

委員 打江 記代

委員 吉田 香央里

3 関係者

清流の国ぎふ総文2024開会行事総合プロデューサー 小島 紀夫

清流の国ぎふ総文2024生徒実行委員会委員長 小林 由奈

清流の国ぎふ総文2024総合開会式委員会副委員長 杉本 幸太郎

清流の国ぎふ総文2024総合開会式委員会委員 山田 笑瑠

4 オブザーバー

副知事 河合 孝憲

清流の国推進部長 市橋 貴仁

副教育長 富田 剛

県民文化局長 箆橋 智基

5 陪席

義務教育総括監 青木 孝憲

教育次長 中川 敬三

清流の国づくり政策課長 加藤 一郎

教育総務課長 野中正史

全国高等学校総文祭推進課長 有田 誠二

岐阜県高等学校文化連盟会長 高 橋 宗 彦	
6	議事録
別紙のとおり	

議 事 録

発 言 者	発 言 内 容
清流の国 推進部長	ただ今より岐阜県総合教育会議を開催する。竹中委員におかれては、本日はオンラインでのご出席となる。 本日は、「清流の国ぎふ総文２０２４の活動を通して」を議題としている。 今年度、本県において、全国の高校生による国内最大規模の文化の祭典である第４８回全国高等学校総合文化祭「清流の国ぎふ総文２０２４」を開催した。この総文祭において、高校生の皆様がどのような体験をされ、その経験を今後の岐阜県教育にどう活かしていくべきか、ということについて、委員の皆様に意見交換いただきたいと考えている。 本日のゲストスピーカーとして、開会行事総合プロデューサーを務められた小島紀夫様と、生徒実行委員会のメンバーとしてそれぞれご活躍された、東濃実業高等学校 小林由奈さん、帝京大学可児高等学校 杉本幸太郎さん、加納高等学校 山田笑瑠さんに、総文祭でのご経験や、感じたこと、どのようなことを得ることができたのかなどについてお話しいただき、その後、委員の皆様の意見交換を行わせていただく。
清流の国ぎふ総文２０２４の活動を通して	
小 島 氏	この度、このような貴重な機会をいただき感謝申し上げます。また、何より、同じ大きな目標を掲げて、同じ時を過ごしてきた生徒委員会の仲間とも言える小林さん、杉本君、そして山田さんと、こうして再び椅子を並べられることを大変嬉しく思っている。 私は演出という仕事を生業にしており、総文祭終了後の秋に開催した「『清流の国ぎふ』文化祭２０２４」では、開・閉会式の総合演出を務めさせていただいた。 演出というのは、クライアント、いわゆるその場を主催する方の要望を受けて、伝えたいこと、その目的に対して様々な方法を模索して、より伝わる形で、それを

形づくり、アウトプットすることであると考えている。その上で大切なのは、ミッションを明確に受け止めることであると考えている。

「清流の国ぎふ総文2024でのミッションは何なのか」。開会行事を企画運営して成功を目指すこと、これはもちろんのことであり非常に大切だが、何をもって成功とするのか、その答えは一つではなく、非常に曖昧であるとも言える。

私が総合プロデューサーとして捉えたミッションが二つある。一つは、秋の『『清流の国ぎふ』文化祭2024』へ高校生たちの文化への熱い思いをつなぐこと。

二つ目は、これが一番大事だと思っているが、高校生が主体として進める清流の国ぎふ総文2024とにするということ。

今日はいくつかお題をいただいている。まずは、県内高校生と関わるうえで感じたことを述べてほしい、ということであった。こちらの音声をちょっと準備してみたので、お聞きいただきたい。

《総文祭プレ大会1年前に実施された東京での総文を見た生徒達の会話音源
(ラジオドラマ風)》

2023年秋に開催されたプレ大会に向け、その1年前に東京で実施された総文を見て、生徒実行委員会の皆さんが毎回毎回議論を重ねて、どうしたらいいだろう、何をやったらいいんだろうっていうのを、ものすごく真剣な面持ちで議論を進めていた。私は総合プロデューサーの立場で、「どうする？」をプレ大会にぶつけたらどうかということで、プレ大会は「どうする清流の国ぎふ総文2024」というテーマのもとで高校生の皆さんが色々な議論を経て進めた。今、ラジオドラマ風にしたものをお聞きいただいたが、これはまさに会議の様子そのもので、生徒たちがものすごく真剣に取り組んでいる姿に本当に頼もしく感じるとともに、皆が誰かのために何か役に立ちたいと思っている真摯な姿、その強い思いを感じることができた。

この議論の中で、例えば開会式委員が企画検討する中で、式典での開催部門や各県生徒の入場行進があるのだが、これは47都道府県が参加する。開催部門は22あり、分類を分けて計69人の代表者が入場するのだが、ものすごく時間がかかる。

大人の論理では、時間がかかりすぎるのではないかなと思うところだが、あえて、その方々に来ていただくなら必ず一言は自分の言葉で話してほしいと、開会式委員のある生徒は、そういう思いで真剣に考えていた。それを受けて、開会式委員会や全体の生徒実行委員会の議論の中でも、誰もそれを否定することなく、とても素晴

	らしい議論を行っていた。ともすれば、大人は式典時間について考えてしまうところを、入場行進する人にも思い出作りをしてほしいと大切に考えていた。このように、生徒たちのほうがある意味で真理をついた考え方をしているということに気づかされ、また驚かされもした。 私は、生徒たちや生徒実行委員会の皆さんを鏡にしながら、どういう形で総合プロデューサーという業務を務めればいいのかということを真剣に考えた。 生徒実行委員会は、１００人を超える様々な個性の集まり。その個性を活かし、一人一人の考え方や価値観の違いを尊重し、その彼らの可能性を形にするために何をすれば良いかということを考えた。そして、シンプルに、彼らのアイデアに対して決して否定をしない、つまり「ノー」と絶対に言わないということを決意した。 そして、やりたいこととできることは違う、ということをやちゃんと根気よく全員に共有していくということに努め、提案企画を変化させて、何度も何度もそれで良いかという確認を繰り返し、そして進化をさせていくことに努めた。 ややもすれば、時間がかかってなかなか形が見えないこの進め方に対しても、実に粘り強く真剣に取り組み、その結果、素晴らしい成果を上げたのが彼らである。 岐阜県の高校生は捨てたものではない。すごいじゃないかと、本当に心から感じた総文祭であった。 今日は、その生徒実行委員会から３名が来ているので順番にお話しいただく。
杉本さん	総合開会式委員会の副委員長を務めさせていただいた。まず、生徒実行委員会に入るきっかけと、プレ大会や本大会を通してどう感じたか、そして今はどうかといったこととお話しさせていただく。 私は父が吹奏楽の指導者であったことから、吹奏楽やオーケストラの演奏を聴きに行く機会が多くあり、また父から舞台の魅力などを聞いていて、そういったことから元々舞台に興味があった。中学時代は吹奏楽に入っており、そういった経験をさらに活かしていきたい、そして岐阜県魅力を全国へ発信していきたい、と思って実行委員会に応募した。 プレ大会までの道のりとして、まず生徒実行委員会に入って驚いたのは、学校での部活とは違い、全員、本当に情熱を持った人が集まっていて、毎回の会議では議論が白熱した。行ったり来たり、そして脱線したりしながらも、たくさんの意見が出てくる会議は、やはり学校とは違う会議でとても楽しかった。しかし、意見は出

てくるものの、やはり固まっていけない。その状況がプレ大会まで続き、本当にどうしようと思った時に、小島プロデューサーからプレ大会のテーマは「どうする清流の国ぎふ総文2024」にしてはどうか、と提案をいただき、プレ大会を通して本大会のあるべき姿を見つけていこう、といった話になった。

プレ大会を通して、総合開会式のあるべき姿は、ポスターや大会テーマソング、大会テーマの中にあることに気づき、また、プレ大会では22部門全てが参加することができなかったのも、本大会では全部門が参加する総合開会式にすることを心に誓った。

プレ大会を通して自信がつき、プレ大会の最後にも本大会と同様に書を掲げたのだが、「大丈夫、私たちならできる」といった書を掲げて、その言葉は今でも私たちの礎となっている。

そんなプレ大会を通して、本大会は22部門が参加し、アオハルあふれる総合開会式、そして総合開会式だけで終わらせるのではなく、パレードや各部門大会へとつないでいく総合開会式にすることを方針として掲げた。

プレ大会の「どうする清流の国ぎふ総文2024」のテーマを受けて、本大会では、「これが私たちの清流の国ぎふ総文2024です」と、自信を持って言い切るようにすることを目指した。

プレ大会が終わって方針が見えた後も、実は、どうするの連続で、総合開会式の台本が完成したのが7月上旬であった。そういつて、どうする、どうするを繰り返しながら、ゲネプロの時まで最後の最後まで粘り強く挑戦した。

国際交流委員会や、広報イベント委員会、パレード委員会そして総務委員会など、プレ大会の総合開会式まではあまり関わってこなかった各委員会とも連携するなど、新しい挑戦をたくさんしてきた。私自身、開催地発表の台本制作の一部を担わせていただいたが、たくさんのダメ出しがあったり、なかなかOKが出なかったり、先が見えない中、何回も投げ出したくなった。しかし、そんな中でも支えてくださったのが小島プロデューサーをはじめ県庁の方々、JVの方々、そして生徒実行委員会の仲間が、自分のことを信頼してくれている、頼りにしてくれているといった思いから、最後までやり遂げることができた。

総合開会式では、フィナーレで私たちが届けたいメッセージを話させていただいたのだが、その時の鳴り止まない拍手、そして次期開催県の生徒実行委員会をはじめ

	め、観客の方々、そして警察の方までもが涙した感動的な空間と舞台は、今でも忘れられない。また大会後、堀教育長から、市町村長さん方が感想を語り合っていたとお聞きしたり、岐阜県高文連会長の高橋先生から総合開会式での思いがパレードや各部門大会へつながったとお聞きした時には、私たちの思いが確かに伝わったのだと実感した。 総文祭は今の自分の誇りと自信。総文祭を通して、粘り強さや協調性を学んだ。一人でやることはとっても簡単だが、仲間とやると化学反応が起きるということを実感した。こんな素敵な総合開会式を作ることができたのだから、どんな困難でも乗り越えることができるといった自信がつき、そのような粘り強さ、そして自分ならできるといった自信をもとに大学の総合型選抜に合格することができた。 私が進む理学部は^{ことわり}理を追求する学問であり、総文祭で学んだ粘り強さや協調性は役に立つということを確認している。また、文化芸術の柔軟性や重要性、可能性といったものも総文祭を通して感じた。将来は化学の研究を進めていく中で、文化芸術と化学を融合させた研究を世間に発信していきたいと思っている。
山田さん	総合開会式委員会で、本大会では秋篠宮皇嗣同妃両殿下と悠仁様のご説明係を務めさせていただいた。私は元々人と関わるのが好きで、日本だけでなく、海外にも目を向けて留学したいなと小さい頃から考えていて、その中で、高校に入学した時に、実行委員の先輩方のPRを聞いて、国際交流などをする委員会もあり、すごく楽しそうだなと思った。色んな人と交流できる、色んな人の考え方や生き方を知ることができる大切な機会なんじゃないかと思って、生徒実行委員に立候補した。 活動する中での悩みとしては、私が担当したのは台本作りで、私と杉本先輩と、もう一人の同級生の3人で小島プロデューサーをはじめプロの方々とお話をしながら台本を作る担当だったのだが、先輩も同級生も熱い方なので意見がぶつかり、どちらも引かないといった感じで、あたふたすることもあった。しかしそれを見て、「私も今のままじゃだめだ」と思った。 今まで熱量をむき出しにすることをしてこなかったのが、その2人を見て感化されて、私も2人の話し合いに積極的に参加するようになった。 委員会に入る前とは変わって、自分の意見を相手に主張するようになったし、ちゃんと意思を伝えられるようになったのかなと思っている。 プレ大会が始まる前までは3人で机で話をして想像しながら台本作りを進めた

り、こうした方がいいんじゃない、という話し合いをしていたが、実際のプレ大会では、いつどのタイミングで演者さんに舞台に出てもらうかという指示を舞台袖で行う役割だったのだが、体力的にも1日ずっと立ちっぱなしでとても疲れるし、すごく忙しい。自分で流れを覚えて、ここでこのタイミングで誰を出す、というのを暗記しなきゃいけないので、体力的にも精神的にもすごく疲れるんだなと。話し合っただけでは想像できないことがあるんだなと分かり、思い通りいかないことにすごく難しさを感じたが、それと同時に、本番成功することができたら、とても気持ちいいなと思って、本大会に向けてより気持ちが高まったきっかけになった。

本大会では、皇室の方の担当をしてねと言われたので驚いたが、本番では皇室の方々の後ろの席に座って舞台を見ていた。気持ちを固める間もなく、不安を感じる間もなく、本番を迎えたので、緊張とか焦りよりは楽しみだなという気持ちだった。

自分が作り上げてきた、ちょっと関わった台本を実際に皆が演じてくれているのを見ることができ、しかも皇室の方々にご説明させていただける機会をいただけて、すごくいい経験になったと思う。

総文祭が終わって、私は正直終わった実感があまりないが、総合開会式が終わった直後、皇室の方々が退席される際に「ありがとうございました、とても楽しかったです」と仰っていただけたし、私の後ろに座っていらっしゃるたくさんの来賓の方々の中には、涙してくださっている方もいらっしゃったり、「よかったよ！」と笑顔で声をかけて下さったり、多くの方が最後まできちんと見てくださって、母もオンラインで見ていたが、涙ながらに感動を伝えてくれて、頑張ってたよよかったなとすごく思った。

一番成長したなと自分で思うのは、やはり人との交流の仕方や立ち回り方。どういうふうに接するとどうなるのかとか、そういう部分を身をもって学ぶ経験ができたんじゃないかなと思っている。

私はまだ高校2年生で、来年度受験だが、この先の人生でいろんな人と関わる中で、例えば面接であったり、友達との付き合い方にも活かせるのではないかと感じましたし、人間には一人一人異なるその人ならではの個性、核があると気づき、また、その核、その人の熱い思いを聞く、ということはなかなかできないから、この実行委員会に入って、多くの人の熱い気持ちに触れることができて良かったなと思った。

小林さん	生徒実行委員長として、総合開会式のときに生徒代表で挨拶をさせていただいたほか、パレード委員として企画運営をさせていただいた。 まず私が総文祭に興味、というか総文祭を知ったきっかけについて。中学生の頃、総文祭というものがあるということを聞き、楽しそうだなあと記憶に残っていて、その後、高校に入って総文祭の委員の応募チラシをもらった時にすぐに応募した。 私はイベントや学校行事、例えば文化祭とか体育祭というのが大好きで、皆で多くの人といろいろな経験をして最後に完成してよかったね、っていうその瞬間が大好きなので、参加させてもらった。 また、私は岐阜県がとても大好きで、例えばきれいな川、岐阜市へ向かう電車に乗っている時などに毎回車窓から見える川を乗り出すように見るくらいに好きなのだが、そういう川のきれいさとか、森が家の近くにあるので、それも何だか良いところだなんて思えて好きだし、食べ物も美味しくて、そういう岐阜県の魅力を多くの、県外の人だけでなく県内の人も改めて知ることができたら何て良いんだろうというふうに思い、こういう県の魅力を伝えられるような行事に参加させてもらった。 活動する中での悩みは、総文祭は１００名以上の人が関わって議論しているので、色んな様々な個性がある中で「絶対に成功させたい」という人が集まっているからこそ、「こうなんじゃない？」、「いや絶対違う、こうなんだよ」といった熱い話し合いがあって、「自分はより良くしたいのに、なぜあの人は意見を否定してくるんだろう」と思ってしまう時があった。 しかし、話し合いをしていく中で、自分が良くしようと思って話していることに対して、相手が言い返してくるということは、相手も私と同じくらい、あるいは私以上により良くしようと思ってくれているからこそなんだ、と気づいて、そういう人の心の温かさとか、その熱量を知り、理解することができた。そして、その普段の話し合いの中で議論になっても、「(相手は)より良くやろうとしてくれているんだ」と前向きに考えられるようになった。 正直、プレ大会前まではあまり実感が湧いていなかったのだが、プレ大会を通して、次は私たちの番なんだと気持ちを改め、絶対に成功させてやる、と皆の気持ちがより一層高まったんじゃないかと思っている。そして、実際の現場を経験し
------	---

	メージがつかめたことによって、「プレ大会ではこうだったから、本番ではこうしよう」という共通認識をもとに話し合いを深めることができた。 本大会は、わくわくどきどきが半分、緊張が半分だった。2年間皆で本当に頑張ってきたことを多くの人に見せることができるんだというわくわくと、長い期間をかけて準備してきたからこそ、絶対に失敗できないという緊張の気持ちだった。 実は、総合開会式で私は少しだけ失敗してしまって、自分の出番が終わった後に大号泣してしまった。ああ私ってこんなに熱い思いで取り組むことができたんだと、その瞬間に改めて知ることができて、ちょっと悔しい思いもあったけれど、自分の熱い思いを知ることができたので、それはそれでとても嬉しく感じた。 総合開会式の時に私が生徒代表としてお話しさせてもらったが、最初は本当に緊張して硬くなっていたが、話すうちに、今までの2年間の話し合いやPR活動の様子、「いけるよ、由奈ちゃんなら」という皆の言葉などを思い出し、最後まで一度も台本を見ずに自分の気持ちを込めて言い切ることができて、そのことはもうずっと誇りに思っている。 終わった後に感じたことは、本当にいろんな人に支えてもらったということ。皆の思いがあったからこそ、総合開会式の挨拶でも最後まで言い切ることができたし、また開会式のエピローグで流した、パレードへつながる動画も、本当に周りの方々、事務局の方がいなかったら、実現することができなかった。 そういったことが色々あったので、総文祭を通して人の温かさやありがたみというのを改めて知ることができた。本当に何十年先までも言い続けることができる良い経験ができたと思っている。
小 島 氏	今お聞きいただいたように、総文祭の実行委員の皆がものすごく熱くて、毎月1回ずつ実行委員会があるのだが、その実行委員会だけでは物足りず、臨時実行委員会というのを何度もやった。 さて、県からは、この文化芸術という中で、人づくりや地域づくりについて感じていることがあったら話してほしいというお題もいただいている。 私の方から少しお話をさせていただくが、部活動の部門にも、演劇、音楽、ダンス、色々ある。例えば演劇は、発声から入ってセリフを覚えて、そして脚本、演出、美術の製作、音響、照明、それからその脚本の意図を読み取りながら想像して所作

	を決めていく。そして皆で稽古を重ねる中で、舞台終了後に大拍手を上げる。一人ではできない総合芸術だと思う。そうして積み重ねたことによる成功体験、この成功体験の積み重ねこそが人づくりと言えるのか分からないが、その自身のコミュニティとか、ポテンシャルを高めていくのに役立っていくのではないかなと思う。 分かりやすい話でいうと、音楽では、合奏・合唱する場合もそうだが、それぞれの担当が自由なテンポや音量で奏でていては成り立たない。メロディーがあって、そしてハーモニーがあって、そしてそこにリズムがあると。その調和が美しさを生んでいるということを、合奏や合唱を通じて、それぞれが個々に感じながら協調性みたいなものが育まれていくのかもしれないと思っている。 演劇、音楽、文化、そして芸術は、繰り返しの反復練習による個人の気づきや、団体としての気づき、その気づきがそれぞれ価値を高めていくのではないかな。したがって、実は「効率」とは無縁のものかもしれないが、しっかりとそこに個々の個性が活かされているということは、私もこれまで経験をしてきている。 効率的に答えを導き出す術、公式などは、実は個性の尊重とは真逆ともいえるかもしれないというようなことも感じている。 文化芸術は感情を表現することができる。その感情を受け取ること、共有することが人々の心を動かす。感動的な体験が、誰かの喜びや苦しみに寄り添って共感の絆を築くことにもつながっていくのではないだろうか。この絆は、障がいのあるなしに関わらず、誰もが互いに尊重し合える心を育んでもくれると思う。 異なる背景を持つ人々が共に学び合い、共に心を動かす場を共有できるのが文化芸術の力ではないだろうか。同じ体験を通して感動を共有すること、それが他者の存在への理解を生み出していくのだと思っている。地域の祭りや伝統行事などを通して、ふるさとへの愛着や誇りが形成されていくのも同様ではないだろうか。 本日ここへ来るにあたって、「一言でこの総文祭をどう言い表すか」ということを、生徒実行委員の皆には考えてきてもらった。それぞれ発表いただきたい。
小林さん	色々考えたが、最終的にはやはり「アオハル」だと思う。 私は特に部活動も入っていないし、打ち込んでいるものもなかったもので、高校生活を振り返った時に一番最初に出てくるのが総文祭だと思っている。

	アオハルというのは、もちろん部活もそうだが、日常生活で皆でわいわいとしていたことも含まれると思うので、例えば委員会の中で話し合ったりとか、委員会の後に皆でご飯を食べに行って仲を深めたこととか、総合開会式やパレードが終わった後に皆で涙を流したりというのも、何にも代えられない最高の宝物だと思って、やはり青春の「アオハル」しか思い浮かばなかった。
山田さん	私も「アオハル」。私は本番では舞台を見ていたが、演者さんが舞台上で発した言葉が「あの時あの場所で私が『こうしたらいいんじゃないか』と提案したことだったりとか、そういった場面がどんどん積み重なって、「あ、今しかできないことをしているな」と、台本を考えたり、作業をしながらもずっと思っていたので、そんな日常生活を振り返って、アオハルという言葉以外は見つからなかった。
杉本さん	「アオハル」と言いたいところだが、私は「未来へ漕ぎ出す原動力」。 もちろん私もこのアオハルは忘れられることができないし、単なる良い思い出だけではなくて、将来私が進むべき道を照らしてくれる道しるべのような存在だと思っている。 総文祭は、本当にこれまでにないくらいとても大変で、とても感動し、そしてとても大きな自信になった。私はこの自信や誇りを胸に入試へ挑んで合格することができたし、また、私は総文祭以外にも色々な活動をしていたが、それらの経験にもつながった。 今後困難に直面した時に、きっとこの経験を思い出すだろうし、どんなに大変な時でも、この時はどうしていたかな、と思い出すと思う。いくつになっても挑戦し続けてアオハルしていきたいと思う。
小島氏	最後に、県や教育委員会の方から、県や教育委員会に望むことはないか、県内の子どもたちに期待することはないかと聞かれたので、2、3分だけいただいて、私なりの考えを述べさせていただく。 私は、文化芸術の魅力というのはロジカルに説明しきれない要素が含まれていると思う。その魅力の根源は、人間の感性や感覚、直感に深く関わる部分にあるからではないだろうか。 音楽を聴いて涙があふれてくる、絵画を見て心が震えるといった体験を論理的に

説明するのは難しい。文化芸術は私たちが普段意識していない感情や記憶を呼び起こす力を持っているのだと思う。

また往々にして、明確な答えや意味を持たないことがある。この曖昧さや多義性が、見る人や聞く人に、自由な解釈を許して、その人自身の経験や感性と結びつくことで新たな意味を生み出しているのではないかと考えている。

文化芸術の魅力というのは、まさにそのロジカルでは説明しきれない余白の部分にこそ宿っているのではないかと考える。

この曖昧で抽象的な魅力が私たちの心を自由にし、生きていることをより豊かに感じさせてくれるのだと信じてやまない。

効率的に正解に到達することが重視される一方、個性や創造性が見過ごされていくこともあるのではと感じることもある。一人一人の可能性を引き出し、未来を切り開く、その力を生む・育む場が増えることを期待したいと思う。

ここで、映画のワンシーン、ちょっと興味深いシーンをご紹介します。

「男はつらいよ」のワンシーンで、旅に出る寅さんを見送るため柴又の駅へ一緒に向かう満男くんが、途中寅さんにこんな質問をする。「人間ってさあ、人間は何のために生きてるのかな」。難しいこと聞くなあと戸惑いながらも、考えて寅さんはこう答える。「何というかな、あれじゃないの、ああ、生まれてきてよかったなっと思うことが何遍もあるんじゃない。生きていて良かったなと、そのために生きてんじゃないか」。

語学や文法、歴史、方程式を解くのももちろん大事だと思う。生きている、ということを実感できる瞬間は、人間にとって何より大切なんだと気づかせてくれる映画のワンシーンではないかと思っている。

最後に、今年の9月に誕生日を迎えられた秋篠宮妃紀子様から宮内記者会に寄せられた文章の一部を文そのままご紹介させていただきます。

「この夏は家族3人で岐阜県を訪問しました。岐阜県では、『全国高等学校総合文化祭』に出席しました。地元の高校生たちが中心となって時間をかけて作り上げた開会式の第三部、開催地発表は、『青春（アオハル）』がテーマでした。各部門の紹介をつなぐ演劇『子ども卒業式・アオハルって？』では、舞台上の高校生が、自分たちは子どもなのか、それとも大人なのか、考え悩む自分たちの思いを率直に表

	現し、アオハルは十人十色で、それぞれの道を切り拓こうとしていると語っていました。全国から参加している高校生たちは長男も含めて、そして私たち大人も一緒になって、アオハルの舞台にそれぞれが心動かされていたように思います。長男が全国の高校生たちの作品や発表を見聞きし、岐阜県内各地の高校生が数年前から協力し準備して大きな祭典を作り上げてきた様子にふれる大事な機会になりました。」 この文章を拝読した時は、私もぎふ総文に関わることができて本当に良かったと、心より思える瞬間だった。
清流の国 推進部長	大変熱い思いのこもった素晴らしい発表をありがとうございました。 それでは、ここからは意見交換を行います。ただいまのお話も踏まえて、総文祭の成果をどのように今後の岐阜県の教育に活かしていくかといった観点から、ご意見をいただきたい。
意見交換	
村上委員	小島プロデューサーはじめ、生徒実行委員の皆さん、本当にお疲れ様でした。 私も開会式等を拝見し、本当に久しぶりに感動という言葉が心に湧いた。 皆さんの話を聞いていると、やはり一つのもので作り上げるためのパッション、そのパッションを持って一つのもので作り上げていたんだなと。 その中で色々と意見が対立されることがあって、そのことに関しては、バトルするわけではなくて、相手も同じように一つのものでしっかり作り上げていきたいというパッションを理解し、相手への敬意や相手の意見を聞く傾聴の力といったものを育んでいかれたのかなと思う。 皆さんの郷土愛が非常に高いので、皆さんが社会人になったら、私の老後もとても素晴らしい、期待も出来る、目を細めて見ていられるような、こんな世界になるのかなと思っている。 生徒実行委員の皆さんはご自分で応募されたと同ったが、他の委員の方も皆同じなのか。例えば定員以上に集まった場合は選定とかそういったことはされたのか。

小 島 氏	選定というか、生徒の皆さんそれぞれにやりたいことがあって、例えば、パレード委員や開会式委員など、五つの委員会の分類があって、それぞれのキャパシティについては、それはもう生徒たちのやる気をそのまま受け止めて受け入れよう、というふうに事務局が対応してくださった。 最初は定員が60人だったと思うが、それを100人以上になっても受け入れようと、そういう体制が素晴らしかったと思う。
村上委員	それは安心した。私もずっと40年間大学で学生を教えてきたけれども、評価としてパッションがあるかどうか、ということを見つめていた。 3人の生徒の皆さんの本当にパッション溢れる姿を見て、将来の岐阜県を支えてくださることに期待をしている。
打江委員	開会式からパレードまで見させていただいた。本当に感動して、心から、ああ来てよかったなと思った。本当に感動という言葉では言い表せなかった。 今はAIなど、人間的なものが段々と失われている中で、人として感じるもの、人だからこそ感じられるものというものを勉強させていただいた。 総文祭では、入場の切符を切る時から高校生が携わっていてとても驚いた。皆さんが本当に気持ちを一つにして作り上げる意思というか、情熱というか、そこがすごく伝わってきた。それぞれの学業や部活動などがありながらも何年間も携わられて、本当に皆さんが色々な意見を出しながら、人の意見も聞き、一生懸命となって作り上げたという思いが伝わってきた。ステージでも、とても通る声で私たちに訴えかける皆さんの声がすごく印象的だった。 思春期の多感な時期に自分の思いを話すというのは、恥ずかしいのではないかなと思うが、素直な気持ちで、自分の思いを伝える姿は素晴らしかった。そしてそれが会場の皆さんに伝わって、会場の皆さんと一体となる様子がよく分かり、皆さんの自信に溢れた姿と、練り上げてきた気持ちがそこに表れているのだなと感じた。 また、一人一人の岐阜県に対する思いは、若い人たちも地域地域で培ってきてるのだということもすごく伝わった。私は飛騨の人間だが、飛騨では飛騨なりの風土や伝統があり、文化がある。その高校生にもきっと根付いているんだろう

	なということも感じた。 皆と話し合っって作り上げていくということは、社会に出てからも大事なことであり、そこでは協調性を求められることもあるが、ぜひ経験で得た力を発揮してほしい。 総文祭を見て、私はこれからの岐阜県は大丈夫だと思った。本当に感激した。パレードも大変素晴らしかった。
市川委員	総文祭を見て、自分も昔、和太鼓のあるミュージカルに参加したいという思いで参加して、一生懸命になっていたことを思い出した。 プラス面もマイナス面も、色んなことを感じる場所に参加できたことは、皆さんにとって本当に幸せなことだなあと感じた。 表には出すことはできなくても、心の中で熱い情熱を持っている人は、皆さんの周りもたくさんいると思う。先ほど小島プロデューサーのお話の中にもあったが、ロジカルに説明できない芸術や体験から感じるということが、どれだけその後の人生や社会にとって、また人間にとってどれだけ大事か。数字では表すことができなかったり、文字にしても伝わらなかったり。こういったことをどう教育に活かしていくかということだが、そういう経験ができる場を作るのももちろん大事だが、皆さんが今後リーダーの立場になった時、表向きには熱い人じゃなくても内に情熱を持っている人はいるんだということも心に留めておいていただきたい。 社会で企業を経営している立場からすると、皆さんのような熱意ある方はぜひ欲しいなと思った。 意見を時にぶつけ合いながらも相手の意見を尊重し、時間はかかるかもしれないけれど、目標を持って進むということで良い相乗効果が生まれる。そうしたことが、教育の現場や社会、岐阜県の盛り上がりにつながっていくと良いなと思った。
吉田委員	私は特別支援学校の発表を見させていただいた。私は息子を連れて見学させていただいたのだが、その時に気づいたのは、実行委員の生徒の方々が自主的に取り組まれている姿だった。そして、学校の生徒たちがお店を出して、実行委員ではない生徒も、作ったものを自ら一生懸命PRし、説明しながら売っていた。 実行委員会の方の思いが、実行委員だけでなく、参加する皆にも波及しているな

	と感動した。特別支援学校の子たちのポテンシャルであるとか、見方が変わった部分もあって、まだまだ知らないことがあるなと思った。 息子も、色々な岐阜県の学校の発表を見て、それぞれに特技があって、それぞれ違うことに打ち込んでいて、色んなことに取り組んでいるんだねっていうことを、小学生ながらに見て感じて分かったことがあったようだった。 発表で得た経験とか知見も多かったであろうし、見ているだけの人に対しても、与える影響がすごく大きいイベントだったなと感じた。 皆さんの話を聞いて、とても良い経験をされたというのが伝わってきたが、自分の高校生の頃と比べると、やはり社会に出てから学ぶことをいち早く学んでおられて、自分のものにしておられるというところが良いことだなと思った。 学校では、基本的な教養としての学力はとても大事だけれども、授業では学べないことを獲得されたのだなと今日の話の中で感じた。 皆さんはもちろん、実行委員の方以外の方も含めて、参加された皆さんが何かを獲得されたんだろうなと思うので、教育の観点として言えば、社会に出るにあたって、こういうことを学生の中で経験するとおそらく一生忘れないと思う。そういう機会が教育行政の中でチャンスとして与えられるのもすごく良いことだと思うし、今後そういった機会をより多くの方に参加してもらえるように伝えていっていただきたい。 岐阜県の人材育成にもすごくいい影響を及ぼしていると思うので、大人の世界も含めて皆で盛り上げて伝えていきたいなと思った。
竹中委員	生徒さんのお話をお聞きして大変感動した。約100人もいらっしゃる実行委員会を取りまとめて、本当に大変苦労はされたと思うけれども、皆さんもおっしゃるように、本当に一生の財産として、この経験はこれから生きてくると思う。 私は羽島での吹奏楽を聴きに行かせてもらったが、実行委員会の方、司会をやられている方、本当にしっかりしていってらっしゃった。テキパキと運営されていた。 吹奏楽で使うたくさんの楽器の段取りから何かもかも、本当にスムーズにやっていらしゃった。全国レベルの学校が一堂に会する場合は貴重だなということを実感したわけだが、スポーツとはちょっと違って1位2位を決めることがなかなか難しいものもあるし、評価採点の課題もたくさんあると思うが、そこで次につながる課

	題が出てくることもまたひとつ勉強になるのではと思う。 最後に、小島さんもおっしゃった文化芸術の重要性について。私が一番苦手なジャンルで、ちょっと拝聴していたのだが、確かに人間の一人一人、個性を育てていくということが非常に重要だと思う。先ほどの採点ではないが、ロジカルに評価できない部分、やはり感性とか、そういったものを大事にしていく重要性を感じたので、私自身、今日は大変勉強になった。
清流の国 推進部長	皆様方から一通りご意見を頂戴したが、もう一言ご意見があれば。 高校生の皆さんも何かご意見がありましたら。いかがでしょうか。
小 島 氏	高校生たちが本当に生徒実行委員会として一生懸命やったと。先ほど小林さんの話の中にもあったが、私たちだけではできていなかったと。陰で支えてくれる方、県庁の方、事務局の方、そして裏で支えてくれる方がいてこそ出来ることだということを彼らは感じてくれた。 総合プロデューサーを務める際に、実は知事に「どういう方向性で進めればいいでしょうか」と相談した。知事は「高校生のやりたいことを実現させてあげてください」と。この一言でふっ切れた。まず、こういう大前提があったということをお伝えしたい。 もう一つは、堀教育長が、演劇や合唱、色々な文化芸術に長けた造詣の深い方であったこと、さらに、おそらく他県では絶対ないだろうと思うが、高文連の高橋会長が、おそらく98パーセントぐらいの参加率で実行委員会に参加され、そういった、陰で大人が支えた場があったからこそできた、ということを最後に付け加えさせていただきたい。
山田さん	皆様の話を聞いて、自分はその話を聞くまでは、自分がその実行委員をしたという過程で得たもの、経験しか見えていなかった。 改めて第三者の方の視点からの意見を聞いて、他の人、舞台を見てくださった人にも、きちんと私たちの想いが届いたんだということを初めて感じる事ができたので、すごく嬉しかった。ありがとうございます。
清流の国 推進部長	最後に、知事と教育長からご発言いただきたい。まず教育長からご意見を。

教 育 長	今日は3人の生徒の皆さんと小島プロデューサーから本当に貴重なお話をお伺いできた。メモしながらお聞きしていたが、大事な言葉があちこちにあって、これらは本当に大事にしていきたいなと思う。 総文祭だが、高校が80数校、そして特別支援学校が20校あまり。100を超える学校の生徒たちは、なかなか普通の学校生活や教育活動の中では一緒になって取り組むことがないが、それが総文祭という形で、共同で活動ができるのは本当に貴重な機会であるし、岐阜県の高校生のパワー、力を発揮できる場であるし、私たち大人からしても、それを実感できる本当にいい機会だったと思う。 小島プロデューサーが仰られた「心を自由にする」ということが、私にはとても響いた。教育活動の中で、毎日の授業もそうだし、休み時間がちょっとした部分もそうだと思うが、やはり一人一人が心を自由にする。これが活力を生み出すのではないか。イマジンの「想像」がクリエイティブの「創造」へとつながる。その元になるのがそういった部分ではないかと思う。 先ほど村上委員も自分たちの老後の話をされたが、今後、どんどん大人になって残り少ない人生になっていく中でもやはり一人一人が輝くこと。それが今後の少子化や人口減少の中ではキーになる部分ではないのかなと、今日話を聞いて感じた。 教育に携わる者としては、皆さんから託されたメッセージをしっかりと胸に刻んで進めていきたいと思う。 最後に、教育委員会だけではなく、知事をはじめ、県民文化局などの知事部局の方々も、一緒になってこの舞台を作っていこうと取り組んでくださったことを感謝申し上げたい。ありがとうございました。
清流の国 推進部長	では、古田知事からもコメントを。
知 事	皆さんの講話とそれぞれ教育委員の皆様の話を伺って、まさに、私もまた同じ思いで大変感激して聞かせていただいた。 この10万人の大交流であった総文祭、高校生にとって、これを動かしていくことは大変なことであり、また貴重なことであったと思う。

自分が高校生の時はどうであったかと考えていたが、60年前の高校3年生の時、ぎふ国体が開催され、私は炬火リレーの最終ランナーに選ばれた。皆さんの総文祭と同様に、それは一生の思い出として残っている。

国体が終わった後、当時の松野知事とラジオで2人で対談する機会があった。その際に松野知事から言われた言葉で印象に残っているのは、「君はこれからかわいそうな人生を送るね」ということ。「なぜですか？」と訊ねたら、「あの古田はどこで何をしてるかとずっと言われ続ける。一生、道を外れたことはできないね」と。その当時は、まるで重荷をしょって歩けといったそんな雰囲気であった。

私はそんなコメントを言うつもりはないし、生徒の皆さんにはむしろ今の熱量でこれからも伸び伸びと活躍して欲しいと思う。

主催者である県の立場からすると、小島さんも仰ったように、国文祭へつなぐとか、生徒皆でやり切るとか、そういう目的からすれば、100パーセント、200パーセントの大成功だったと思う。

県として昨年1年間は「文化イヤー」だと言っていたのだが、言わばその「文化イヤー」の1番バッターが総文祭の皆さん方であり、大谷翔平選手にも負けない特大ホームランを飛ばしていただいた。昨年1年間、文化イヤーとして岐阜県を大いに盛り上げていただいたと思っている。

また、「まつりでおわんない」ということで、皆さんの熱量を今度は県政に活かしていただくことも大いに期待したい。

それから、アオハルについて話があったけれども、秋篠宮皇嗣妃殿下は総文祭でのアオハルという言葉に強い印象を受けられたようで、その後、ご自身もアオハルという言葉をお遣いになっていらっしゃるということであった。それほどまでに皆さんの熱量が圧倒的であったということを感じた次第である。

色々なプロジェクトをやる時は、決して良い事ばかりではない。むしろ取り組む中で残った課題についても、やはりレガシーとして残していただけるとありがたい。また、これは教育長と相談しなければならないことだが、岐阜県版の総文祭を毎年あるいは何年かおきにやっても良いのではないかと、そんなこともひそかに考えている。

総合教育会議は、平成27年度から始まり今回で23回目。皆様には、大変お世

	話になった。人づくり大綱の策定も重要な仕事であったが、やはりコロナ禍で教育現場がどうあるべきかということを真剣に議論したことが大変印象に残っている。 私自身は、今回の総合教育会議をもって卒業をさせていただくが、アオハルスピリットを大事に、今後も生きていきたいと思っている。ありがとうございました。
清流の国 推進部長	ありがとうございました。 それでは以上をもって、岐阜県総合教育会議を終了させていただく。 本日はお疲れ様でした。